

群 教 セ	G10 - 01
	令 2.275 集
	道徳

自己を見つめ、よりよい生き方について 考える道徳科の授業の工夫

—自分と友達との意見を比較する思考ツール（座標軸）

の活用を通して—

特別研修員 荻野 裕介

I 研究テーマ設定の理由

中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」（平成 29 年 7 月）には、「道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」ということが道徳科の目標として示されている。また、「道徳性の発達の出発点は、自分自身である。」ということや、自己を深く見つめることがよりよく生きていこうとする道徳的実践へつながっていくということなど、「自己を見つめる」ことについての重要性を示している。「はばたく群馬の指導プランⅡ」にも、「児童生徒が常に自己を見つめながら、他者ととともに多様な視点から話し合うこと」と、自己を見つめさせる授業を展開することの重要性が示されている。

研究協力校は、与えられた課題について積極的に考えることができる生徒が多い。しかし、友達の見解に耳を傾け、もう一度自己を見つめ直すことまでできる生徒は少ない。

そこで、授業の中でよりよい行動を考える場面の設定と、その行動について自分だったらどうかを考え、友達の見解を受けてもう一度自己を見つめるための思考ツール活用場面の設定を考えた。ここから、自己を省みて、よりよく生きるために大切なものは何かを考えられる生徒の育成を目指して本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

「自己を見つめ、よりよい生き方について考えられる生徒」を育成するために、以下の2点を手立てとして設定し、道徳科の授業を行った。

【手立て①】

登場人物のよりよい行動を考え、よりよい生き方につなげる場面の設定

【手立て②】

「自分だったらどうか」を考え、自他の意見の違いを「比較」する思考ツール活用場面の設定

～展開前段～

【手立て①について】

道徳の教材文の中には、登場人物のよい行いや悪い行い、行動すべきかすべきでないかという葛藤の場面などが描かれている。そこで、教材の中の登場人物に限定して考えることで、人間としてのよりよい生き方を「理想の姿」として考えやすくしている。また、よりよい行動を全体共有することで、自分自身のよりよい生き方について多面的・多角的に考えることができると考えた。

～展開後段～

【手立て②について】

手立て①で考えたよりよい行動を「教材の内容」として終わらせるのではなく、「自分事」として捉えさせることが重要である。そのために、手立て①で考えたことについて「自分だったらどうか」を考える場面を設定する。そして、「思考ツール（座標軸）」を用いることで、自分と友達との立場の違いが可視化され、分かりやすくなる。自分と違う立場や同じ立場の友達がいることを知ることで「なぜ」という理由に注目させやすくする。そして、なぜその立場なのか理由を発表させ、「同じ立場だけど理由は違う」「違う立場だけど理由は同じ」といった意見の比較をさせることで、多面的・多角的な考えに触れることで、自分の考えを深めることができるようになると考えられる。

さらに、「自分事」として考えさせるために、「教材の内容」から「自分たちの実生活」に話を広げる。理想として考えていたことが実生活でできていたのか、いなかったのか見直す機会になると考えた。

～終末～

手立て①②を受けて、「今までは・授業から・これからは」の三つの視点で振り返りをすることで、自己のよりよい生き方について考えることができるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 手立て①では、個人思考の後に、全体共有の時間を設定した。個人では思い付かないような意見に触れることができ、よりよい生き方を多面的・多角的に考えることができた。
- 手立て②では、実生活について振り返らせた。教材の話では「きまりを守る」と言っていた生徒も、守れていないことがあったと自己の姿を見つめ直すことで、道徳的価値の理解を深めることができた。実生活で守れている生徒も、きまりの意義について考え、改めてきまりを守ることの重要性に気付くことができた。
- 手立て①、②と段階を踏むことで、終末の振り返りの段階で、自身のよりよい生き方について考えることができた。

2 課題

- 座標軸は、手立ての組合せや教材文によって立場が偏ることが分かった。四つの領域が設定されているよさが引き出せるような、より有効な使い方を研究したい。
- 座標軸において立場に偏りが出た際、生徒の考えを揺さぶる補助発問を取り入れ、再考させるなど、よりよい生き方について、より多面的・多角的に考えることができるようにしたい。

実践例

- 1 主題名 規則の役割 内容項目 C- (10) 遵法精神、公德心 (第2学年・2学期)
教材名 「美しい鳥取砂丘」 (出典：日本文教出版)

2 本主題について

(1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」の内容 C- (10) 遵法精神、公德心をねらいとしている。民主的な社会においては、互いの権利を守り、調和的な生活を保障するために、公平な立場の議会や国会が規則や法を定める。そして、それらを守ろうとする遵法精神は、社会生活の中で守るべき正しい道である公德を大切にすることによって生み出される。したがって、社会は、より民意を大切にしたい法とそれを守ろうとする善良な市民の協調によって成り立っている。法やきまりがなぜ守られないのかということから、よりよい生き方を見つめることは、中学生にとって大切なことである。

(2) 生徒の実態について

この時期の生徒は、学校の校則や、学級のルールなど、きまりを守って生活できる生徒が比較的多い。しかし、「きまりがあるから」という理由で守る生徒が多く、きまりの意義を理解し、それらが守られていることで、自他の生活が守られているという意識は希薄である。そこで、きまりの意義について考える活動を通して、きまりによって自分たちの生活が守られていることを理解し、よりよい生き方について考え、これらを守っていかうとする態度を育てられるようにする。

(3) 教材について

国の天然記念物に指定されている鳥取砂丘に、景観を損ねるような落書きが頻繁になされている現状がある。本教材では、落書きに出くわした主人公の家族が、どうしたら落書きをなくせるのだろうかと考える。そして、すでに落書きを規制する条約があることを知るが、それでも落書きがなくなる現状を知り、悩んでしまうというものである。法やきまり (教材が法律を扱っているので、今後、法ときまりと表記する) を、自己の自由や権利を束縛するものとする中学生は少なくない。なぜ法やきまりがあるのかを考えることができるこの教材を通して、よりよい生き方について考えられるようにする。

3 本時及び具体化した手立てについて

今回の授業では、教材文で示されている「鳥取砂丘の落書き」を例に、法やきまりについて、よりよい生き方を考えるために、以下の手立てを取り入れた。

【手立て①】登場人物のよりよい行動を考え、よりよい生き方につなげる場面の設定

本教材では、若者達が縦横二十メートル四方もの落書きをして騒いでいる様子が描かれている。「なぜしてしまうのか」ということを考えた上で、この若者達を取るべきであったよりよい行動について考えさせた。教材の内容について考えることで、よりよい生き方について「理想の姿」として考えやすくした。また、このよりよい行動を友達と共有させることで、自分自身のよりよい生き方について多面的・多角的に考えられるようにした。

【手立て②】「自分だったらどうか」を考え、自他の意見の違いを「比較」する思考ツール活用場面の設定

自分が鳥取砂丘に訪問した場合を想像させ、手立て①で共有されたよりよい行動について、「自分だったらどうか」を考えさせた。その際、これらの行動が大切な行動だと「分かる・分からない」という心情の軸と、これらの行動と同じ行動が「できる・できない」という行動の軸を用いた思考ツール (座標軸) で立場を可視化した。自分と違う立場や同じ立場の生徒がいることを知らせることで「なぜ」という理由に注目させた。その上で、なぜその立場なのかという理由を発表させ、「同じ立場だけど理由は違うな」「違う立場だけど理由は同じだな」といった意見の違いを比較させることを通して、自分の考えを深めることができるようにした。そして、鳥取砂丘の話から生徒の実生活に話を広げ、実際に法やきまりが守られているかどうか、自己を見つめ直させた。

4 授業の実際

「導入」では、本時の道徳的価値への方向付けを行うために、身の回りにある法やきまりを想起させた。生徒からは、「学校の校則」「お酒は20歳になってから」「赤信号は渡らない」を筆頭に、様々なものが挙げられた。どれも守らなければならないものという認識を再確認し、「法やきまりがなぜあるのか」というめあてについて、現時点での考えをノートに書かせた。

- ・日常生活を安全に送るため
- ・平和に過ごすため
- ・平等に暮らせるようにするため
- ・嫌な思いをしないため
- ・楽しく生活するため

「展開前段」では、鳥取砂丘の美しい景色に胸を膨らませながら旅行に訪れた主人公一家が、縦横二十メートル四方もの落書きを目の前にして落胆した心情を確認した。そして、その落書きを完成させて騒いでいる若者達について、「なぜしてしまうのか」ということを考えた。

- ・目立ちたいから
- ・おもしろ半分
- ・テンションが上がって
- ・青春を感じたいから
- ・自然に消えるから
- ・青春を感じたいから
- ・映えるから
- ・悪いことしているのがかっこいいと勘違いして

【手立て①】登場人物のよりよい行動を考え、よりよい生き方につなげる場面の設定

このような理由で落書きをしてしまう人がいることを押さえた上で、この若者達が取べきであったよりよい行動について考えさせた。全ての生徒が1つ以上意見をもつことができた。生徒からは、大きく分けて五つの意見が出た(図1)。同じ意見の生徒に挙手を求め、発言者以外の生徒も意思表示ができるようにしたところ、①の意見と同じという生徒が多数いた。「ほかの人のこと」について具体的にどういうことか問い直したところ、「ほかの人がどう思うかという、気持ち」という意見が出た。

授業終了後の振り返りの記述に

- これからは**周りの人のこと**を考えて行動したい。
- 自分のことばかり考えて、ルールやきまりを守らないのではなく、**みんなのことを考えて**行動していきたい。

という意見が多く見られた。手立て①を共有することによって、自分自身のよりよい生き方に、生かそうとすることに繋がったと考えられる。

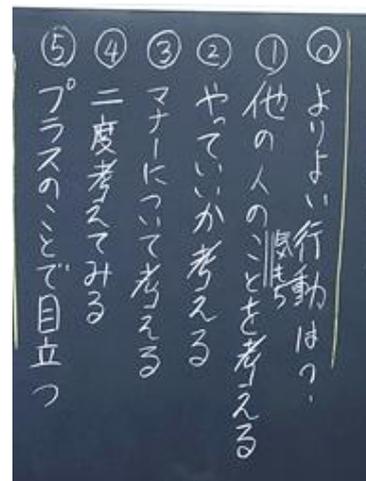


図1 手立て①について

【手立て②】「自分だったらどうか」を考え、自他の意見の違いを「比較」する思考ツール活用場面の設定

「展開後段」では、自分が鳥取砂丘に訪問した場合を想像させ、手立て①で共有されたよりよい行動について、「自分だったらどうか」を考えさせた。その際、これらの行動が大切な行動だと「分かる・分からない」という心情の軸と、これらの行動と同じ行動が「できる・できない」という行動の軸を用いた思考ツール(座標軸)で立場を可視化した(図2)。

ネームプレートを貼った生徒には、「なぜその立場なのか」という理由をノートに書かせた。

今回の授業では、「分かる」の領域に立場が集中した。しかしその中で、「できる」と「できない」、そして「ちょうど間くらい」と上下の領域では、立場の違いが出た。

そこで、なぜその立場にしたのか理由を聞いていった。

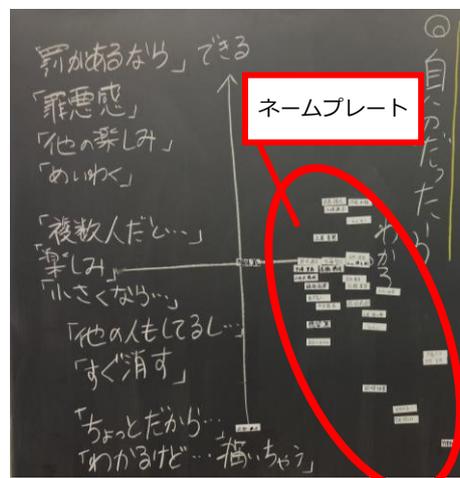


図2 座標軸による立場の可視化

T：下の人から理由を聞いてみましょう。

S：やっちゃいけないのは分かるけど、実際は描いちゃうと思います。

S：ちょっと描いて、すぐ消して、見つからないようにやっちゃいます。

S：ほかの人もやっているし、やっちゃうと思います。

T：なるほど。上の方の人をお願いします。

S：罰金をしてまで描こうとは思いません。

S：描いたら罪悪感が出てしまい、せっかくの旅行が楽しくなくなります。

S：迷惑をかけるような楽しみではなく、ほかの楽しみを見付けます。

T：では、真ん中の人にいきましょう。

S：やっちゃダメなのは分かるけど、友達といたらやっちゃうかもしれません。

S：小さく描けば見つからない気もするので、迷います。

このように意見を黒板で可視化し、自分と友達との意見の違いを比較しやすくした。同じようなネームプレートの位置でも、細かな意見の違いなどが分かるよう、この後それぞれの意見について、同じ意見かどうか挙手を求めて確認させた(図3)。そして、ここまでの意見を聞いて立場を変えてもよいことを伝えた。今回は、2人が立場を変えた。

そして、鳥取砂丘の話から生徒の実生活に話を広げ、法やきまりが守れているかどうか、自己を見つめ直させた。



図3 意見の同意を確認

T：日常生活を思い出してください。守れていないことないですか。「ちょっとだから」「ほかの人もしているし」「バレなければ」ということないですか。正直に、どうぞ。

S：廊下を走ってしまうことがある。

S：3密。マスクをしないで話してしまうことがある。

S：掃除中にしゃべってしまう。

S：明らかに大きいことはしないけど、小さいことはしてしまう。例えば廊下を走ること。

T：自分自身を見つめ直すと、守れていないこと、正直あるよね。めあてに戻ります。なぜ法やきまりはあるのでしょうか。今日は、鳥取砂丘の話から、自分の生活を振り返りながら考えましたね。

というやりとりをし、「終末」の振り返りを書かせた。「今までは、授業から、これからは」の三つの視点を与え、これからのよりよい生き方について考えられるようにした。

今までは、小さな違反をしてしまうことがあった。今日の授業で「法やきまり」は人々が楽しく、よりよく生活が送れるようにあると分かった。きまりの意味を考え、よりよい生活を送っていきたい。

5 考察

手立て①では、教材の登場人物について考えることで、全ての生徒が登場人物のよりよい行動を考えることができた。また、「よりよい行動」を共有させた際、他社の考えに共感する声が聞かれた。一人では思いつかないような行動を知り、多面的・多角的に考えるきっかけを作ることができた。

手立て②では、立場が可視化し、理由を聞き合ったので、「立場は違うが理由には賛成」や「大場は同じだが理由には反対」と、自他の考えを比較することができていた。立場が似ている場合でも、明確に可視化されているので、ちょっとした違いを取り上げることができた。今回、教材文の内容から、「自分自身の守れていないこと」へと話を展開した。教材の時点では「きまりを守る」と言っていた生徒も、守れていない自己の姿を見つめ直すことで、道徳的価値についてより理解を深めることができた。

教材文の内容から実生活に話を展開するタイミングが遅くなると、自分事にできないうちに授業が終わってしまい、自己を見つめることができなくなるので注意が必要であるとわかった。